

かくして、『告白』はキリスト教的観想についてのアウグスティヌスの説明と、そこにキリスト教的観想があらわれる自伝的内容の表明である。理論と出来事は深く結び付けられている。アウグスティヌスは単に回想を書いたのではなく、経験の光の中で、自らの神学を描いたと Kenney は言う。

以上本書は、現代的な「神秘論」の枠組みの中でアウグスティヌスの神体験を捉える先行研究とは一線を画すものである。しかもその研究は、アウグスティヌスにおける「観想」の概念を明らかにするばかりでなく、その解明を通して『告白』全体の議論構成とアウグスティヌスの意図について新たな読み方を与える画期的なものである。

著者は1995年よりアメリカの St. Michael's College 教授（宗教学）。アウグスティヌスおよび新プラトン主義をその研究領域の中心としている。著作は本書の他に、*Mystical Monotheism: A Study In Ancient Platonic Theology* (Brown University Press/University Press of New England, 1991; paperback edition, 2002) が刊行されている。

The Cambridge Companion to Anselm,
 Edited by Brian Davies and Brian Leftow,
 Cambridge University Press, 2004, xiii+323.

矢内 義顕

本書は、ケンブリッジ大学出版局から出版されている Cambridge Companions の中の一冊である。このシリーズでは、すでにアウグスティヌス、アベラール、トマス・アクィナス、ドゥンス・スコトゥスなどが出版されている。アンセルムスの入門書が英語圏で出版されたのは、Jasper Hopkins, *A Companion to the Study of St. Anselm*, University of Minnesota Press, 1972 以来のことである。ドイツ語圏では、Rolf Schönberger, *Anselm von Canterbury*, Verlag, C. H. Beck, 2004 があり、175 頁の小著だが、テキストの緻密な読解がなされている。だが、神学的テーマは論じられ

ない。

本書の編者である Brian Davies は、執筆者の一人 G. R. Evans と共に、Oxford World's Classics の一冊として、哲学的断片を含んだアンセルムスの著作の英訳全集 *Anselm of Canterbury, The Major Works*, Oxford University Press, 1998 を出版している。これも、J. Hopkins が 1974-76 年に The Edwin Mellen Press から三巻本で出版した英訳全集以来のことである。

本書は、12 人の執筆者の論文から成っている。各々の執筆者とタイトルは以下のとおりである。① G. R. Evans, *Anselm's life, work, and immediate influence*. ② Marilyn McCord Adams, *Anselm on faith and reason*. ③ Gareth Matthews, *Anselm, Augustine, and Platonism*. ④ Peter King, *Anselm's Philosophy of language*. ⑤ Simo Knuuttila, *Anselm on modality*. ⑥ Brian Leftow, *Anselm's perfect-being theology*. ⑦ Brian Davies, *Anselm and the ontological argument*. ⑧ Sandra Visser and Thomas Williams, *Anselm's account of freedom*. ⑨ Sandra Visser and Thomas Williams, *Anselm on truth*. ⑩ Jeffrey E. Brower, *Anselm on ethics*. ⑪ William E. Mann, *Anselm on the Trinity*. ⑫ David Brown, *Anselm on atonement*.

本書の構成は四つに区分できる。第一 (①-③) は、アンセルムスの生涯と著作を概観した後、信仰と理性の問題を包括的に検討し、さらに、彼の思想的な背景としてアウグスティヌスとプラトニズムを取り上げる。第二 (④-⑦) は、言語哲学、論理学 (様相論)、完全性の概念を検討し、『プロスロギオン』の存在論的証明を取り扱う。第三 (⑧-⑩) は、アンセルムスが「聖書の研究」と呼んだ対話編を中心に自由論、真理論、倫理学を検討する。最後に (⑪-⑫)、三位一体論と贖罪論という神学的なテーマが論じられる。

以下、入門書という性格を考慮して、個々の論文を簡単に紹介し、併せて最近アンセルムスに関して出版された研究を紹介することにする。

①は、上述のとおり、アンセルムスの生涯と著作とトマス・アクィナスに至るまでの彼の影響を概観したものである。G. R. Evans には Geoffrey Chapman の *Outstanding Christian Thinkers* シリーズの一冊として出版された *Anselm*, 1989 (2001 年に Continuum から再版) があり、本論文はそのダイジェストとも言えよう。アンセルムスの伝記に関しては、最近 J. M. Rigg, *St. Anselm of Canterbury*, 1896 が Wipf & Stock Publishers から再刊されたが、R. W. Southern の二著を越えるものは

ない。②は、アンセルムスの哲学的神学の方法を、神と被造物の存在論的な不均衡、信条と公会議の決定によって解釈された聖書の無謬の権威への信任、神の似像としての人間、本質的に神と人間との協働作業としての探求、全体論的・発展的な探求という五つの根本的な要素から包括的に検討し、さらに現代神学との関連をも明らかにしており、本書の中で最も充実した、読み応えのある論文である。③は、アウグスティヌスの神の存在証明、信仰と理性、神の本性、神の予知と自由意志の問題を取り上げて、アンセルムスと比較するが、プラトニズムについてはほとんど触れられていない。なお本書では、ランフランクスとアンセルムスとの関係を主題的に取り上げた論文はない。前者については、H. E. J. Cowdrey, *Lanfranc: Scholar, Monk, and Archbishop*, Oxford, 2003 が、M. Gibson 以来の優れた研究である。また、アンセルムスの源泉に関する研究としては、G. E. M. Gasper, *Anselm of Canterbury and his Theological Inheritance*, Ashgate, 2004 が、11 世紀の修道院図書館が所蔵する写本を丹念に調査し、ギリシア教父の影響をアンセルムスに認めようとする意欲的な研究である。

④は、アンセルムスの言語哲学を、表示理論、意味論、そして動詞とその個々の意味論的特徴および命題とその真偽まで含めて検討する。⑤は、アリストテレス・ポエティウスから始め、ペトルス・ダミアニと弁証論理学者を検討し、アンセルムスの様相論を哲学的断片も含めて論じる。彼の言語哲学、論理学に関しては、今後 10-12 世紀初頭の写本研究が進むに依りて、その歴史的位罫や意義が明確になるだろう。⑥は、神をあらゆる点で完全であると考えたとしたら、アンセルムスにおいてその完全な存在 (perfect-being) とはどのようなことかを、『モノロギオン』15 章、『プロスロギオン』5 章などを詳細に読み解くことで明らかにする、興味深い論文である。本論に関しては、著者のトマスを始めとする他の研究とも関連づけて読む必要があろう。⑦は、『プロスロギオン』2-3 章の入門的な解説を意図した論文である。アンセルムスの存在論的証明に関する論文は、毎年のように発表されているが、単行本としては、G. Kapriev, *…ipsa vita et veritas: Der 'ontologische Gottesbeweis' & die Ideenwelt Anselm von Canterbury*, Brill, 1998; J. L. Scherb, *Anselms philosophische Theologie*, Kohlhammer, 2000; S. Matthews, *Reason and Religious Tradition: Anselm's argument and Friars*, 2001 などがある。

⑧-⑨は、内容的に相互に関連し合うテキストを取り扱うため、共同執筆の形をと

り、『自由選択について』『真理論』『悪魔の墮落について』を読むための手ほどきとなっている。⑩は、目的論的な倫理学と義務論的な倫理学というカテゴリーに基づいてアンセルムスの倫理学を包括的に取り扱い、その倫理学が11世紀においては完成された姿を見せない後者を基底としていることを論証する、興味深い論文である。この領域、特に『真理論』については、M. Enders, *Wahrheit & Notwendigkeit: Die Theorie der Wahrheit bei Anselm von Canterbury*, Brill, 1999 および同著者による *Anselm von Canterbury: Über die Wahrheit*, Lateinisch-Deutsch, Felix Meiner, 2001 がある。後者は『真理論』のテキスト、独訳だが、解説・注解に前者が要約されている。

⑪は、アンセルムスの三位一体論を、主として『モノロギオン』のテキストによって解説するものだが、最後の5頁で検討される『言葉の受肉についての書簡』13章のナイルの比喩に関する解釈は興味深い。『聖霊の発出について』は、ほとんど触れられていない。これについては、大著 P. Gemeihardt, *Die Filioque-Kontroverse zwischen Ost- und Westkirche im Frühmittelalter*, Walter de Gruyter, 2002 があり、アンセルムスに関しては pp.399-510 で論じられている。⑫は、アンセルムスの贖罪論を現代の英語圏の読者が理解できるようにすることを意図して書かれた解説である。神学的なテーマを取り扱った単行本としては、D. Deam, *The Christology of Anselm of Canterbury*, Ashgate, 2003; D. S. Hogg, *Anselm of Canterbury: The Beauty of Theology*, Ashgate, 2004 がある。

本書では、アンセルムスの『瞑想』『祈り』および『書簡』が主題的に扱われることはない。このことに関連し、Jean-François Cotter, *Anima mea: Prières privées et texts de dévotion du Moyen Age latin*, Brepols, 2001 は、これまでミーニュ版でしか読むことのできなかつた偽アンセルムスの『瞑想』『祈り』の校訂テキストと仏訳を提供する。また M. Corbin を中心に、1986 年から刊行されている羅-仏対訳の、*L'œuvre de S. Anselme de Cantorbéry* もようやく書簡を出版するところまで来た。これらは、今後の研究領域となるだろう。
